

## 3年間を見通して作成したCAN-IDOリストと、思考力を鍛える問いで、アウトプット力を伸ばす

北海道稚内高校は、スピーキングやライティングにおけるアウトプット力を伸ばすため、指導と評価の改善を推進している。3年間を通して身につけさせたい英語力を明確にし、英語科として統一した取り組みができるよう、シラバスや教材を作成。答えが1つではない問いを通して、生徒が間違いを恐れずにアウトプットできるようにするなど、言語活動の充実を図っている。

## 取り組みの背景

## 生徒が意欲的に英語を話せる授業づくりが課題

2023年度に創立100周年を迎える北海道稚内高校は、稚内市唯一の公立高校で、地域の生徒を幅広く受け入れている。英語教育においては、入学生の英語力の多層化が課題であり、英語の資格・検定試験の結果を見ると、1年生の「GTEC」のスコアは、100点台後半〜800点台後半と幅広い。

加えて、どの学力層の生徒も、スピーキングやライティングにおけるアウトプット力に課題が見られた。進路指導部長の山本龍りゅう先生は、自

校の課題を次のように捉えている。

「特に課題が顕著だったのは、スピーキングです。生徒は間違えることを恐れて、積極的に発言できていないように見受けられました。過去の授業は、教科書の内容理解が中心で、本文の内容の正誤について考える活動が多かったからかもしれません。ペアで行う活動も、定型文の反復練習が多く、アウトプット活動に課題がありました。英語の授業でも、予測不能な社会で求められる思考力などを育む必要があると考え、授業改善に取り組むことにしました」

18年度、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業の指定を受け、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ

Ⅲ」において、生徒同士の言語活動を通して思考力・判断力・表現力等を育成する指導や評価の改善についての研究を始めた。

「授業は教師個々の裁量に任されており、英語科として統一した取り組みとなっていませんでした。そこで、当時の研究主任を中心に、3年間を見通した指導や評価の確立と、授業での言語活動の充実を目指しました」（山本先生）

## CAN-IDOリストの作成

## 3年間を見通したCAN-IDOリストやシラバスを作成

まず取り組んだのが、CAN-IDO


ORリストの作成だ。新学習指導要領を踏まえ、卒業までに身につけさせたい英語力を4技能5領域ごとに設定。それから逆算して、各学年での到達目標を作成していった。そして、国立教育政策研究所の調査官や北海道教育委員会の指導主事からもアドバイスを受け、CAN-IDOリストを完成させた（図1）。

そのCAN-IDOリストを反映させる形で、各学年のシラバスを作成。シラバスには、CAN-IDOリストで示した各領域の能力を育成できるよう、単元ごとに育成したい力を設定。評価規準や方法も定め、統一の取り組みになるようにした。

また、18年度から年次進行で、各

学年共通で使用する教材の開発を進めていった。

「CAN-DOリストやシラバス、教材は、毎年、英語科内で見直しています。入学してくる生徒が抱える課題は、その年によって変わるからです。また、教材には旬なトピックも加えるなど、生徒が興味を持てるような工夫をしています」(山本先生)



**山本龍**  
進路指導部長  
やまもと・りゅう  
教職歴11年。同校に赴任して8年目。英語科。



**中村和徳**  
教務部・英語科主任  
なかむら・かずのり  
教職歴3年。同校に赴任して3年目。



**川田亮**  
1学年担任  
かわた・りょう  
教職歴6年。同校に赴任して2年目。進路指導部。英語科。

**学校概要**  
設立 1923 (大正12) 年  
形態 全日制、定時制/普通科、商業科、衛生看護科/共学  
生徒数 1学年約160人  
2021年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、小樽商科大、北海道大、高知大、釧路公立大、札幌市立大などに17人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、青山学院大、関西外国語大などに延べ85人が合格。

言語活動の充実

答えが1つではない問いを設定し、生徒の発話を促す

具体的な指導上の工夫を見ていく。同校が最も注力しているのが、生徒の思考力・判断力・表現力などを鍛え、自ら発信したくなるような言語活動の設定だ。山本先生は次のように語る。

「間違いを恐れて発言できないのであれば、答えが1つではない問いにすれば、生徒は思ったことを自由に語る。」

に発言できるのではないかと考えました」

「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」で、そうした問いを盛り込んだ各学年共通の仕様のプリントを作成し、授業で活用した。例えば、1年次の「コミュニケーション英語Ⅰ」では、自転車通勤の長所と短所をそれぞれ考え、自分なら自転車通勤をしたいかどうか、理由とともに述べるという課題を出した(P.9図2)。「テーマを多角的に捉えてほしい」と思い、長所・短所、賛成・反対な

ど、様々な視点・立場で自分の考えを述べるような課題にしています。主体的に考えられる余地のある問いを用意することで、単語や文法が多少間違っても、生徒は互いの発言を認め合うことができるようになり、間違いを恐れずに発言するようになりました」(山本先生)

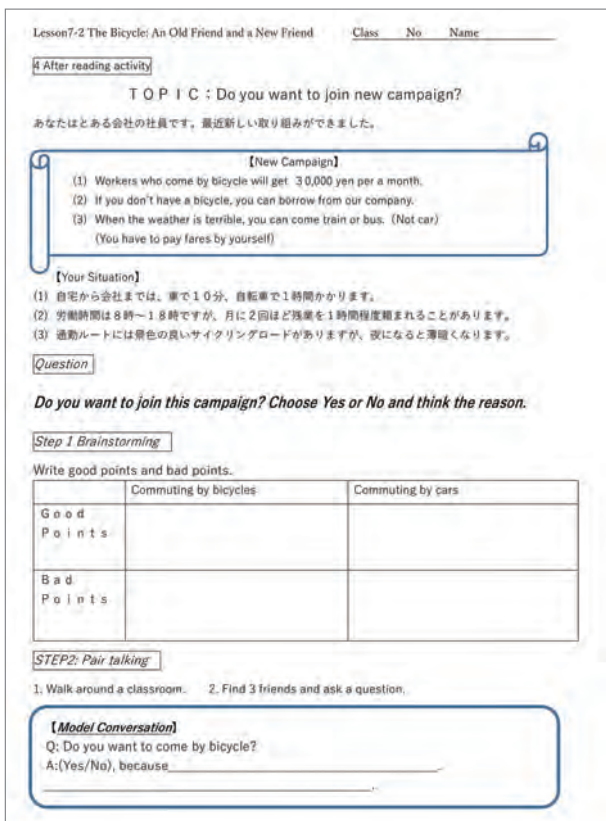
自分の考えをライティングする課題も出した。例えば、パンダの生態をテーマとする単元では、野生動物を守るためにはどうしたらよいのか、50〜70語程度で自分の考えを表

図1 北海道稚内高校普通科 CAN-DO リスト(抜粋)

1年次終了時	
知識・理解・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>間違いを恐れず、積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる。</li> <li>教科書等の内容に触れ、自国や異文化への関心を高めることができる。</li> <li>リズムやイントネーションなど、英語の音声的な特徴に注意して聞いたり話したりすることができる。</li> <li>中学校卒業レベルの語彙を活用ことができ、高校入門レベルの語彙を理解することができる。</li> <li>基礎的な英文法を理解し、活用することができる。</li> </ul>
Reading	テキストレベルの文章において； <ul style="list-style-type: none"> <li>キーワード等に着目し、文章の展開や概要・要点をおおまかに把握することができる。</li> <li>書き手の意見や話の詳細等に関する単純な質問に答えることができる。</li> <li>必要な情報について、話の内容を推測しながら読み取ることができる。</li> </ul> 【目標 WPM：70～90】
Listening	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校卒業レベルの基本的な語句を聞き取り、話の展開や概要・要点をおおまかに把握することができる。</li> <li>話し手の意見や話の詳細等に関する単純な質問に答えることができる。</li> <li>必要な情報について、話の内容を推測しながら聞き取ることができる。</li> </ul>
Writing	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題について、自身の考えや気持ちを述べる文章を書くことができる。</li> <li>社会的な話題について、自身の考えや気持ちを述べる文章を書くことができる。</li> <li>導入、展開、まとめの構成を意識して文章を書くことができる。</li> </ul> 【語数の目安：50語～70語】
Speaking Interaction	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題について簡単な質問に答えたり、自身の考えや気持ちについて話し合ったりすることができる。</li> <li>社会的な話題について簡単な質問に答えたり、自身の考えや気持ちについて話し合ったりすることができる。</li> </ul>
Speaking Presentation	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題について自身の考えや気持ちを発表することができる。</li> <li>社会的な話題について自身の考えや気持ちを発表することができる。</li> </ul> 【発表時間の目安：1～2分】
外部試験他	【英検：3級～準2級】 【GTEC：350～420】 【CEFR：A1～A2】

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 1年次「コミュニケーション英語I」の授業プリント



※学校資料を抜粋して掲載。

現する英文を作成させた。

そうした思考力・判断力・表現力等を鍛えるアウトプット活動は、スピーキングやライティングの活動に適した単元に絞って実施している。そうするようになったのは、山本先生が青森県立田名部高校の実践事例を教育雑誌などで知ったのがきっかけだった。

「それまで各単元で4技能5領域を育成しなければならぬと思っていました。しかし、田名部高校では、アウトプット力を鍛える活動を精選していると知り、目から鱗が落ちま

した」（山本先生）

田名部高校の実践を参考に、アウトプット活動を丁寧に行う単元と、インプットを強化する単元に分けて授業計画を作成し直した。アウトプット活動に適した単元では、教科書の内容を発展させたテーマで、生徒が主体的に自分の考えをまとめるライティングやスピーキングの課題、または10分間のデイベートに取り組ませ、パフォーマンステストも実施している。

一方、インプット活動に適した単元では、教科書の内容理解や文法解

読の後、教科書本文の英文を聞き、それを書くディクテーションやリプロダクションに取り組ませている。

「本校は学力が多層化しているため、ディクテーションなどのインプット用教材は、ハード、ノーマルと、2つのレベルを用意し、習熟度に合わせたスキルアップを目指しています」（山本先生）

**情報処理的視点からの読解力の育成**

複数の資料から必要な情報を読み取り、整理する力を鍛える

大学入学共通テストに対応するべく、授業プリントの内容も改善しているという。例えば、山本先生は、教科書の各段落にふさわしい見出しを選ばせる問題を授業プリントで出している。

また、複数の資料を読み、必要な情報を整理・統合して答える問題に対応するため、公務員試験の判断推理のような問題を英文にした問題を、1年次で取り入れている。1学年担任の川田亮先生は次のように話す。

「生徒に、新聞やインターネットから気になる記事を日本語・英語問

わず集めてもらい、それらを題材にして、グループで1つの意見を英文にしてまとめる活動にも挑戦しています。各学年で活動を工夫するとともに、系統立てた取り組みとするためにはどうしたらよいか、英語科内で議論しています」

**学習評価の工夫**

生徒に達成感を持たせ、自信を高める評価を目指す

CAN-DOリストの作成を機に、評価方法も見直した。それまで「コミュニケーション英語I・II・III」は、定期考査7割・平常点3割の比率として評定をつけていた。それを改め、定期考査や日々の見取りでは、「関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」、「知識・理解」の4観点を評価することにした。

「授業で行っている言語活動をきちんと評価の対象に組み入れ、指導と評価の一体化を図れば、生徒は評価に納得感を持ち、活動にも意欲的に取り組むようになるのではないかと考えました」（山本先生）

例えば、定期考査では、教科書本

図3 1年次のパフォーマンステストで使用するルーブリック

自由英作文 (10点程度)		
評価基準 (合計10点)		
語数	50語以上	5点
	40~49語	4点
	30~39語	3点
	20~29語	2点
	10~19語	1点
	10語未満	0点
構成	序論・本論・結論の構成で書かれており、本論には理由が2つ以上書かれている。	2点
	序論・本論・結論の構成で書かれているが、本論には理由が1つしか書かれていない。	1点
	序論・本論・結論の構成で書かれていない。	0点
正確さ	満点は書いた語数によって異なる。そこから文法・時刻ミス1が所につき、-1点	
	40語以上...3点満点スタート	
	30~39語...2点満点スタート	
	20~29語...1点満点スタート	
	20語未満...0点	

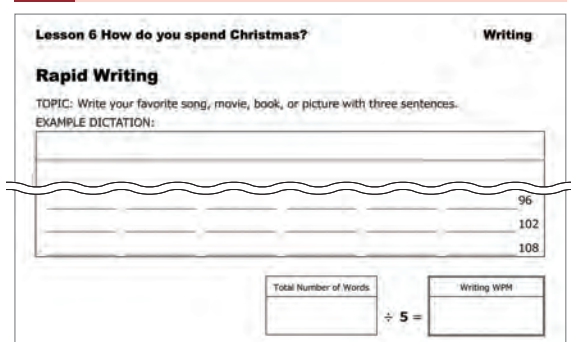
※学校資料をそのまま掲載。

文の内容からの出題は「知識・理解」を、初見の英文を見てライティングする問題は「外国語表現の能力」を評価している。

また、18年度から、生徒のアウトプット力の伸びに加え、思考力や表現力を測るため、答えが1つではない問いを踏まえたライティングとスピーキングのパフォーマンステストを年3〜4回実施。いずれのテストも、事前に生徒にルーブリックを提示している(図3)。

「ライティングでは、50語以上書く」と5点加点とするなど、評価基準を明確にすることにより、生徒に

図4 1年次のラピッドライティングの教材



※学校資料を抜粋して掲載。

とつても目指す目標が分かりやすくなったことで、意欲的に書いてくれる生徒が増えました」(川田先生)

**資格・検定試験の結果で授業改善の成果を測る**

スピーキングやライティングの力は、英語の資格・検定試験を実施し、客観的な指標でも評価している。英語科主任の中村和徳先生は次のように述べる。

「毎年7月に、全学年で『GTEC』を受検しています。スコアで評価されることで、生徒は英語力の伸びを

実感でき、目標も立てやすくなっています」

21年度の2年生のライティングのスコアは、前年度の2年生のスコアよりも、20点以上上昇した。1年生の授業で、ラピッドライティング(図4)を取り入れた成果が出ていると、山本先生は分析する。

「1年生の授業では、『自分の好きな映画や音楽とその理由』など、あるトピックについて、5分間でできるだけ多くの英文を書く活動を、各単元で1回ずつ行いました。単語や文法の間違いを恐れずに、自分の考えを素早く書く力を鍛えたいと考え、試験的に取り入れたのですが、期待以上の成果を出すことができました。『GTEC』の結果から、授業改善の方向性が間違っていないことを確認できました」

### 成果と展望

#### 今後の改善のキーワードは 様々な連携

指導と評価の改善に取り組んだ結果、生徒の英語力は着実に伸びているが、課題もある。1つは、4観点から3観点に変わる観点別学習

状況の評価の実施だ。現在、英語科内で検討している。

小中高連携も課題の1つだ。現在、市内の小学校・中学校・高校が連携し、12年間を見通したCAN-DOリストの作成を進めている。互いの授業見学も行っており、今後連携を深めていく予定だ。

「GIGAスクール構想の推進によってICTを活用した授業に慣れ親しんだ生徒が、次年度から高校に入学してきます。英語科でも小・中学校と連携し、ICTを活用した授業を模索していきます」(川田先生)

さらに、ALTの活用も課題だ。授業の補助的な役割を果たすだけでなく、今後は授業づくりにもかかわってもらい、より実践的で、生徒が主体的に英語を使いたくなる言語活動に進化させていきたいと考えている。

「看護科の『英語会話』の授業では、欧米の若者がよく使うフレーズなど、生徒が関心を持ちそうなトピックをALTが織り交ぜた授業を展開しています。『コミュニケーション英語』でも、ALTと連携し、より実践的な英語力が身につく授業づくりを目指していきます」(中村先生)